

「翻刻」柳瀬正夢「満洲日記」(一九四二年)

白井かおり

解題

柳瀬正夢^{やなせまさむ}(一九〇〇～一九四五年、愛媛県松山市生まれ)

は、激烈な筆致と諧謔性に満ちた諷刺漫画でプロレタリア美術運動をけん引した漫画家であり、詩、舞台装置、グラフィックデザインなど、ジャンルを越境して活躍した芸術家である。とくに漫画やポスターなどの印刷美術に価値を見だし、労働者を束縛する鎖とそれを破壊する爆弾、資本家に怒りをぶつける労働者の拳など、多くのイメージを生成した。そして社会における一本のねじ釘でありたい、との思いで使用した、サイン代わりの〈ねじ釘〉マークは、柳瀬の代名詞となっている。

ここで翻刻した「満洲日記」(東京都現代美術館・柳瀬正夢文庫¹⁶⁷)は、一九四二年、建国十年を迎える満洲を訪れた柳瀬の旅日記である。鉄道総局のある奉天に到着した四月九日から、海拉爾^{ハイル}から蒙古平原へ向かう五月五日までの日録と、ロマノフカ村での取材メモがおさめられ、とくに満洲東北部での行動をうかがい知ることができる。タテ158ミリ×ヨコ204ミリの22枚(44頁)のルーズリーフと、手帳から切り離れたと思われる紙片4枚(タテ146ミリ×ヨコ123ミリ…3枚、タテ72ミリ×ヨコ123ミリ…1枚)で構成されている。表紙などについてはおらず、資料名は東京都現代美術館の「柳瀬正夢文庫目録」に拠った。本日記はこれまで、井出孫六『ねじ釘の如く——画家・柳瀬正夢の軌跡』(岩波書店、一九九六年)、田中益三「プロ美グラフィティ」『朱夏』第二一号、一九九八年)、中村喜和「ロマノフカ村の柳瀬正夢」『聖なるロシアの流浪』所収、平凡社、一九九七年)において、部分的に引用されている。

この旅行は、三カ月ちかくの旅であり(「満洲の生活美——原住民の生活を訪ねて」『婦人之友』一九四二年一〇月号)、六月初めに帰国したと推測されるが、詳らかにされていない。残された日程表(柳瀬文庫²⁶⁷)からは、満鉄弘報課の招聘で、四月一四日から五月一三日までの一カ月間に、奉天—新京—哈爾濱^{ハルビン}—黒河—鉄山包—佳木斯^{ジャムス}—牡丹江—横道河子(ロマ

ノフカ村) — 哈爾濱 — 齊齊哈爾^{チチハル} — 海拉爾 — 哈爾濱 — 舒蘭 (大日向村) — 吉林 — 新京 — 奉天をまわり、国境風物、新興都市、開拓移民村、ロシア人生活、博物館、ダム、撫順炭鉱といった、満洲の主要な産業や文化を網羅的に視察したことが分かる。また、柳瀬が旅行時に携行していたと思われる「スケッチブック」(柳瀬文庫²⁴³)には、「満洲諸民族の生活図譜」と題する、「皇業十周年記念の建設譜として生活面からみる満洲国の骨格」を紹介する構想が記されており、この視察が建国十年の記念事業に関わるものであったと推測できる。なお、この「スケッチブック」には、構想メモのほかに、齊齊哈爾(五月二日)、海拉爾、哈爾濱、満洲里(五月四日)、三河地方などで記された意匠のスケッチや取材メモが残されており、日記の空白時期の足跡をたどることができるが、詳細は別の機会にゆずりたい。

ところで、柳瀬正夢の中国・満洲体験は、読売満蒙視察団として参加した一九二九年(満洲・上海)を皮切りに、三一年(朝鮮・大連・奉天)、三二年(上海)と続き、日本の中国に対する侵略が本格化するなかで、満鉄などから招聘されることもあり、三六年(満洲)、三七年(満洲)、三八年(満鉄北支事務局招聘、天津・北京・大同・雲岡)、三九〇四年(華北交通招聘、天津・北京ほか)、四二年(満鉄弘報課招聘、満洲)、四五年(新京・奉天)と頻繁になった。それは一九三二年の検挙、そしてプロレタリア文化運動の解体以後、漫画家としての活動が国内で制限されていた時期でもあった。柳瀬は原点に立ち戻ろうと、青年時代に置いた絵筆をふたたび手にし、油絵の道に進みはじめる。

そしてしだいに、現地生活の「砲声と、人間動物の体温と、冷厳な自然とを誰もがしなかつた仕方でも描き出してみたい」との思いをもつようになる(「近きよりと近況」柳瀬文庫²⁵⁹、一九四〇年)。それは生活に対する関心となつてあらわれ、この満洲旅行では、「生活の工夫」を見て歩くこととなり(「満洲の生活美」前掲)、スケッチブックには家のつくり、意匠や道具などが描き込まれた。同時代においては、生活に根ざした、生産的な新しい文化の創造を掲げた地方翼賛文化運動や、手仕事に美を見いだした民芸運動とゆるやかに連動するものであろう。

日記には、黒河の国境風景、黒河神社や兵舎、鉄山包の韓家開拓団本部、佳木斯の市街と弥栄村の開拓団、軍都・牡丹江の市街といった訪問先のほか、車窓から見える切妻形の農家、平原、鳥の大群などの風景が、ときにスケッチや俳句とともに率直に綴られている。色彩の捉え方についても、例えば北に向かう列車のなかで、黄味を帯びた平原を、ジョンブリアン色、オークルジョン、フレンチバーミオンと細やかに描写している(四月一七日)。それは、北京や満洲の印象を「鼠グレー」「灰色グレー」と表現するなかで(「北京四題」柳瀬文庫²⁶⁰「満洲の美しさの在り方について」柳瀬文庫²⁶¹)、

捨象されてきた風景でもあった。

また、俳句は当時の柳瀬にとつて数少ない創作活動の一つであり、四月二〇日の黒河では国境、二二日の綏化く佳木斯間の列車では解氷・流水など、同じモチーフで複数詠まれている。とくに黒河は、柳瀬が柵も鉄条網も監視の目もないところを見て、「国民意識の真底に厳とせし国境線あり」と、自分の内なる国境線を意識した場所である。ここでは「ちふりき国境黒河ぬりつぶせり／たち舞ひて黄塵国境ぬりつぶせり」などの句が記されている。

日記からは、まとまった文章をあまり発表することのなかった、柳瀬の活動や思想の一端が垣間見える。黒河では特務伍長に案内され、画家としての決意をかみしめることもあった。「簡素厳冬を想い涙ながる。わが仕事の出発点ここにあり肚にめいず」（四月一八日）と。

翻刻にあたり、東京都現代美術館柳瀬正夢文庫所蔵の資料を使用させていただいた。記して感謝申し上げます。

凡例

一、挿入、削除などは、それらの記号を残さず、確定した文章を記した。ただし、見せ消ち、削除の跡がある箇所であっても、読解のたすけとなる場合には、適宜「」内に示した。

一、日付が示されていない箇所には、推定される日付を＊のあとに補った。

一、本文のカタカナとひらがなの表記および仮名づかいは、誤用もふくめて、すべて原文のままとした。

一、漢字は、一部の固有名詞をのぞき、新字体で統一した。また変体仮名、合字、異体字は通例の字体に直した。

一、明らかな誤字、脱字には、右行間にママを付した。

一、句読点、カッコは、読みやすさを考慮し、適宜加除した。また改行は文意によって施した。

一、傍線、傍点、圈点、本文中の記号○、（）内の文章、ルビは、原文のものである。

一、適宜脚注を追加した。

一、スケッチ等は、本文の該当箇所に図版で収録した。

一、破損等により判読できない箇所、または文字が欠落している箇所は、一字分を□で示し、推定される文字を右行間

に示した。

一、記述の一部に、今日の見地からすれば不適切な表現があるが、当時の時代的背景を考慮し、原文のまま収録した。

四月九日

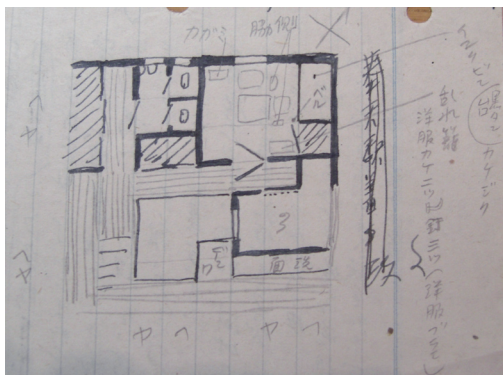
湯岡子に目醒む。スイミン不足で頭が重い。外は風が強い。プラットホームを大股に朝鮮鳥が歩つてゐるのが何となく大陸へ入つたといふ感じを与へる。デツキに出て東天を拝す。やがて鞍山駅、車窓右手下車口に苦力群がみえる。同じ列車で大連から来たものだらう。彼等の群が開札口を開放れるころ列車も動きだす。列車の行手の往クワンに添つてゆく。それに先行して地元職工群が通勤してゐる。とても元氣いゝ列はやがてフミキリにせかれて先の列でS字形に先へ延びてゐる。事務所正面にすひこまれてゆく。林立する煙突、溶コウロ、建国の大き力がむく／＼煙をはいて盛り上る。駅前満人少年の親切、汚ないポーターが正確、馬糞の都、キビ／＼した弘報、奉天神社に参り写さだのや。ヤマトホテルに昼食す。黄塵万丈、解氷と同時に地にへばりついてゐた。タン、馬糞、大便の類が微塵と舞ひ上る。

奉天は満洲一の水質の由。

吉順絲房に黄塵的展望。

ゴミ市をほつつき鉄を90銭で買ふ。他の店は150銭。

国民服の骨トウ屋。



ホテル間取り (4月9日)


部屋の説明「かがみ/脇側/ベル/インクビン、黒タン台、カケジク/乱れ籠、洋服カケニツ、釘三ツ (洋服ブラシ)」（右上）、「洗面/デンワ」（下）

弘報気付の手紙を開くと（三月廿七日夜）「北京はもうすつかり春です。あんずや桃はこゝ一週間たゝざ一せいに開花し、柳も漸く芽ぶきそめ、昨日は例の蒙古風が訪れました。」四月一日付のには「東京はもう桜が満開、だといふに霜が降つたり変な気候です。うち

の庭は今桃と李が満開、菜の花もきれい。」

十四日⁽¹⁾

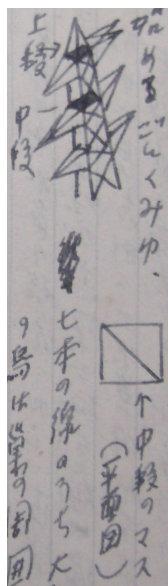
かつかつ間に合ひ四時二分奉天発、N君見送り、列車満員、列車は東へ進む。樹木がように北に傾斜してゐる。鳥が群がる。列車はゴムタイヤの二輪大車のようにはつむ。ゆるい起伏の丘は陵線^マを空へつないでゐる。切妻形の農家がみえる。土糞が規則正しく、ウネは何故カーヴを画くか、水がないかと思ふと水溜りも大小ところどろにみえる。川がみえる。二米幅の^{ところ}。初めて土壁^マ（四隅にはルイのある）を周らした農家を発見、平倉、家畜小屋など、やがて鉄嶺。給水タンクもめづらし。鉄嶺を開放れ、部落に平房子をみる。堆肥の群も初めて、水色の格扇うれし、古塔はるか、畑中に三人の百姓が高梁で畑垣を編んでゐる。畑中に長方形の土糞堆肥を発見。初めて老鮮農婦をみる。安価な泥の切妻形の家に障子が特色、低い禿山が迫り、骨組中の家など見る。

煙突かざりも始めて、けじめなき大河川上遙か龍首山みゆ。

近く列車に沿つて高圧電柱現る。鳥が巢を作つてゐる。（胸の白いのがカサ、ギ、ゲーゲーと鳴くと満人列車ボーイいふ）最上段で作つてゐるのが一番多く、二段目へ作つてゐるのが二番。この場合は

（1）同日付で、鉄道総局弘報課長から各鉄道局総務課（資料係）長・新京支社庶務課長にあてた、柳瀬の視察に関する手配依頼文書（柳瀬文庫²⁶⁷）が発行されており、翌日の日記には新京にて旅行許可証が出されたとの記述がある。

既に上段に先客あり、重ねて中段に作る訳。最下段へ作つてゐるのは見当らぬ。夫婦鳥、又上段に一匹が見張るごときもあり。枯枝をくはえて飛ぶ鳥もみる。列車は東に向つてゐる。向つて右側に電柱が並んでゐる。巢は樹の東南隅から始めるごとくみゆ。



高圧電柱とマスの平面図

七本の線のうち大部分の鳥は巢の周囲の骨柱以外は最上部の単線の上に止つてゐる。たつた一匹二段線へ止つてゐるのを目撃したが、裸線であつたら大変だと思ふがどうしたことか、彼等の群が止りつればみ電線障害を起すといふ。

七時四五分暮るゝ、点灯す家などあり。

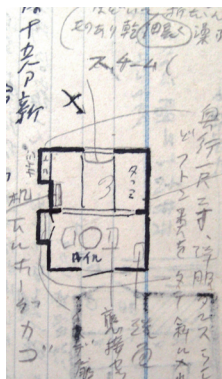
しかしまた薄暮、日誌を書き終えた警務員と話す。

南新京駅でトツブリ暮る、新京着八時十五分。



大興ホテル間取り (4月14日)

部屋の説明「机下にホーグカゴ、灰落し／カケジ／奥行一尺三寸、洋服ダンスらしく上に一本竹渡しあれどフトン類をタテ斜に入れてある。／スチーム(スチームの上に浴衣をほどこいて細長く折たゝんだものあり。乾燥ふせき)／釘一本洋服掛なし」(上)、「イスデ扉をおさへてゐる／応接セット／洗面、コップ一ツ、ガラス台、カバミ、下にタン壺」(下)



八時十五分新京着。社員会の鈴木氏が出迎へてくれる。ヤマトホテルに寄り山田君を訪ねあつてなくホテルに引返し、電車にて興安大路の宿にゆく。車中満軍人と朋友二人、一人はコメカミ長く、のび／＼たる満人をみる。夜学の帰りらし満人美術学生、商業生など。起伏ある街は排水によきとか、大々未完成の大都の闇をぬける。誰か一人の力強きまともりある計画制を感じるゝことかできる。鈴木に送られ大興ホテル15号室に落つく、といふより荒々と開けつばなしの部屋、ソマツなれど一応あるものだけはある。洋服カケなし、釘一本、汚れた風呂、汚れた浴衣。真裏を列車音立てゝ走るに夜中目醒め日記整理、二時、小便所はヘドで三つ共つまつてゐる。

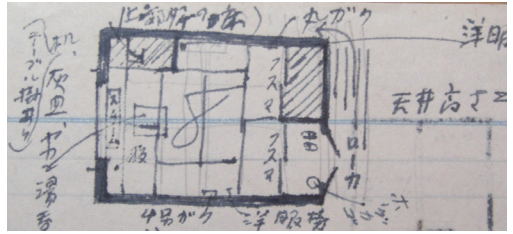
(2) 山田清三郎 (一八九六—一九八七)。

十五日

曇り、温かし。二階に水が上らぬらしく廊下で立騒ぐ客の荒々し声、女中のゆきゝに目醒む。時に八時。シエードとカーテンを引いたがまだシエードのかゝつた様な室内、ガラ／＼女中来り電灯つける。洗ったタオルがカラ／＼に幹つてゐる。冬中封じきりのような物置の通路を三階上屋上に出て、東拝す。片隅ところ／＼に残雪をみる。南新京駅に近き位置。真裏を線路が横ぎり、ゴルフ場、競馬場。その方から線路を渡り、苦力群が続々フリ分けの荷を肩にして、都心に入りくる。よくみると満人巡捕らしいのが後部に付そつてゐる。国民服事務服の男女が行交つて通勤。大都は西南に向つてふくらんでゐる。興安大路がまつすぐに中学生がデヨーギを引いたようキレイな市区、齒のぬけたようだが表面商店街の裏は住宅街といったふう。一応いろ／＼あり方をこゝろへた街、どんより黄ばんだたゝずまいの上に要所／＼官庁や記念光塔(ギ事堂風なもの目につく)が浮上つてゐる。いつか粉雪降り来り氷雨となる。弘報主任の永井氏来る。小軀実にきび／＼と豆戦艦の名にたがはず。氷雨についてドロ柳の大街をゆく。

お城に行つて報道部長に会ふ。博識の武人氣持よし。中谷氏の研

(3) 中谷宇吉郎 (一九〇〇—一九六二)。物理学者、雪の結晶を研究。著書『少国民のために 寒い国』(岩波書店、一九四三年)には、柳瀬がこの旅行の際にスケッチした、満洲三河地方の白系ロシア人



社員宿泊所間取り (4月15日)

部屋の説明「(上部ダケの床)／丸ガク／洋服掛け」(上)、「4号ガク／洋服場／ホーグカゴ」(下)、「机 (テーブル掛あり)」、灰皿、ヤカン、湯呑」(左)、「天井高さ二間シツクイ、アクセントなき壁／ローカ」(右)

究にも通じ車窓の雪の結晶^{マヤ}まで撮っていたら、菅原小尉^{マヤ}は弘報用の写真二千枚を持出しみせて下さる。永井氏の腕で軍キモチよく旅行許可証下さる。ヤマトホテルに飯、支社にて書物など調べ買ふ。リュックを事務所に預け鈴木栗原氏と出てうろつき社員宿泊所に泊る。南広場の近くなれば山田君訪ねたが不在。泊所同宿一人。星空となる。一時就寝。

* 四月一六日


十二時十五分ハルピン着。

別に当にはしてゐなかつたがこゝでも出迎へ人はなく、手配などいふでたらめを当にはしてゐないが、先づ高野さんにあつてと、構内から駅長室への出入を訪ねたが、判らず。表てへ廻つたが門衛がつき厳重。駅長室の観念はリン／＼音のかち合つた事務喧嘩のクワン境にあるものと思つていたが、古典に艶光りのするようなゴウク

農家の様子が挿絵として掲載されている。

ワな書斎のような中に美人物画をひかへカギ形の奥にしづもり返つてゐたが、副局長の名さへ知らぬらしく、「そんなのこゝに居ないね」だ。局の在所をきいた僕の総てを頼つた気持ちいけないが「この前を真直ぐ上つて右へ折れると直くだよ」乗物は何かありますか「自動車は高いね」

つつばなされた田舎者は暫く電車停留所の満人案内人の間をゆき、したが判らず、漸く1号電車にのつて二銭出して笑はれた。二銭といつたから出したが二十銭だつた。又電車賃からくる距離の勘念がなりたゝなくなつた。が、日本人乗客が乗換口で注意してくれたのですぐ判つた。ハルピンの第一象を与へた駅長をゴウマンなど誤解したことは間違いで総ては駅長の言はれる通り、そんな人間は駅に不在で、ハルピン鉄道局はこゝであり正しく突当つて右へ折れたところだ。自動車賃の高いことだつてあとで直ぐ判つたことだ。高野さん病気で御不在のため北方の旅の第一のプランはくづれてしまつた。高野さんの部屋へ弘報の川瀬さんが迎へにきてくれてほつとした。玄関口守衛に二十才位のロシア青年がリュウチヨウな日本語で応待してゐるのが偉観だ。

弘報の事務にもロシア人少女がある。鉄道局クラブへ行く途中の通路の柵が  面白いし、小さい小屋の形も面白い。飾りや柵の種類を集めるのも興味だらうと思ふ。外観の記憶はすっかりなくなつたが裏庭の土の盛上りに花壇の記憶が少しある。もつと大きく豪しやなものと思つてゐたが、この建築は荒れはてゐる。Kさん曰く、「日本人がくると泥靴ですぐきたなくなります。ロシア人は表と中

はクレイだが横や裏はきたないです。」

広間にレーピンの模写がある。北鉄セツシユー時のいろいろな画があるが中に海の画あり。北欧的な波浪が岸を洗つてゐるその岩の斜面に体をよこたへてゐるのはブーシユキンだ。元作にはこの人物なき由なるも元作者も模作者も不明。

ヤマトホテルにリュックを置きハルピン日日の落合氏を訪ぬ。氏は明日東安に発つ由なるも開拓民問題についてモデルンに話し合ふ。ザフスカの代用はスズコネギのぎざんだもの、ビールジョツキ二杯ウオツカ小ビン二本づゝ飲むうち素朴で静かなこの好人物も漸く口滑らかなり時を過す。勉強すること多し。遂に馳走となる。十時過ぎて散会。

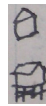
十一時黒河へ向けて発つ。各車満員。写真キを封印して貰ふ。手配なるもの当にならず、三等寝台タテ中段を漸くとつて寝る。上段はスノコの荷物ダナ、斜線のベルトの中に狭苦し、スチーム熱く夜中眼さむ。かいまみる春の大きな星座、緩化らし。

十七日

海倫に目醒む。(六時半)。快晴 温かし? 明るさの錯覚か? 列

(4) 落合掬郎という人物が、昭和二五、六年ごろ、ハルピン日日新聞で満洲の開拓問題を担当していた、という随想を残しているが(まぼろしの開拓地)『月刊あきた』第四六号、一九六六年)、特定にいたっていない。

車は真北に向つてゐる。デツキの口を排して東天を拝す。三等寝枯れし平原に水平に強くなげかける明るい陽足。室のウンキにぼやけた頭全身引しまる。煙がはるかなところへ長々と影を落して走る。湿地帯、水溜りが氷つてゐる。流れも氷つてゐる地の窪みに汚れた雪が散見する。



村落がみえる。切妻形(倉)が中心にみへる。家畜類に目立つのは何故か野に放たれて豚、豚仔、ならべる馬、羊、牛、殊に鶏がめだつ。長い冬があげ放れた感じ。野は更に明るさをまし、土肥を落しゆく牛車や農耕の朝が初まる。処々焼かれた野とオネがジョンブリアン色の中に濃カツ色だ。耕地は整然と焼野は雲影のごとく、ゆるい丘の起伏に這ひ込んだりしてゐる。名もしらない羽先の白いやー大きな鳥が十羽一列に逆行してゆく。とみるまに列車後部はるかなところを渡り鳥の大群が入交ひ△形を縮めたりばかりしながら列車を超越してゆく。土をレンガ形にかためた壁の家。

寒さに目醒める。水溜りの氷は厚い。すぐ北安着、駅の給水口につらゝをみる。この地方は高原だ。ゆるい波のやうな丘の起伏の寄り集つてゐる地勢、斜面はところどころ節でかいたように耕地のウネが流れその中に波頭のような集落がみえてきれい。綿雲の影がまだらに草原をそめてじつと動かない。北安の街はそのまん中に盛り上つて明るい。ヒザ頭冷ゆ。

新鎮にて初めて鉄道自警村をみる。村落の中に白馬が走つてゐる。トラクターの残置されたものを初めてみる。次にこれより地表に残

雪をみる。なれど地平線はびゞれて、かげろうが立つてゐる。尾山といふ仮駅、右手に部落みえ初めて国旗のひるがへるをみる。樹木が遠見にチラホラ見えそめる。野火をみる。タイシヤの端とオークルジヨンの枯草の間にフレンチバーミリヨンにもえてゆく火の色は美しい。樹木ふへる。白樺か美しい。清辰薪山積す。粉雪チラホラ、峽河、七八寸幅の水がキレッツはね返つてゐる。氷は又堅く閉すかとみれば音たて流るあり。解氷する清冽な水の行手アムールにそぐや、消えてなくなる河ともきく。岸には柳の芽がポツト赤らんで群生し猫が銀色に光る。マダラ晴れ。準平原地帯をゆく。

トンネルを出ると始めて黄一色の中に針葉樹をみる。沿線に子供たちがネコ柳の束をかゝえてゐる。あとは潮のひいた後のような平原が永く永く単調につゞき、陽は西の丘に赤々と入る。

黒河着、八時二五分。暗い辺端の駅。駅長旅行不在、手配なし、とのこと。最後の電々？のトラツクに便乗、寒風をきる。途中故障などあり、泥濘の暗き町に入る。

旅館、「夜の宿」の如き階段を上り落ち折れ曲りて部屋につく。発電所の故障とかでローソクを立てる。マツチも面白し。やゝ

冷え、うたゝねにあはてゝ灯を消す。

一人270円 四人720

十八日 快晴、温かし

裏屋根の煙突、朝空に浮き出て美し。思つたほど汚れた部屋でなし。満日の新納氏を再三訪ねて留守、独りアムールの岸に出る。あゝブ

ラゴウエシチエンスク、指呼の間にあり。兵舎立並び河下に向ひて稠密、煙突の煙さかんなり。シベリアに展がる空うらゝかし。結氷し左河面は真白く平板、中間に氷まかれて連り自づと国境線のごとし。ブリキクワンを天ビン棒に碎氷し水汲むあり。街も人も春光に溶けて光りたるものなし。江岸にそひ砂利混りの岸を散歩しゆく日本婦人の姿などあり、柵も鉄条網も監視の目もなくいさゝか啞然たり。なれど自戒し自ら国民意識の真底に厳とせし国境線あり、みだりに入るべからず、かゝる自由解放みるべからず早々街に引返す。

新納氏未だ帰らず。ビュローをみつめて案内して貰ふ。まづ○○○（黒河神社）、こゝより涸れたる対岸更によくみゆ。飛行器の飛ぶみゆ。着陸する姿勢まで。黒河省、満拓を訪ぬ、支所長清水さん○○○（防人）開拓団（最北端開拓団）見学をすゝめられしも次回にゆづることゝす。案内氏に昼食をあげるべくロシアカフェ（フランス式）に入る。ヤサイサラダとスープとパンとコーヒー四品八円九十銭。

新納氏帰らず独り○○○○に至り弘報の許可を得、案内して頂き○○○○にゆく。入庫した許りの防寒具を（特務伍長氏に）つけて貰ひ鉄条網を背に雪の中へ立つて頂き写生する。夕陽に近く実にソウ重なる塑像。○○○長の案内で○○○を見せて頂き辞す。簡素厳冬

（5）このあと伏せ字で記された「○○○長」は、「特務伍長」と推測される。そのほかの伏せ字は不明である。要塞などの軍事機密に関わるであろう。

を想い涙ながる。わが仕事の出発点ここにあり肚にめいず。未だ早けれど宿に帰る。新納氏留守に來しよし。部屋階下に移転、同じなれど広き感じ、早寝す。十二時頃酒気を帯びて新納氏現る。一時間余話しこむ。

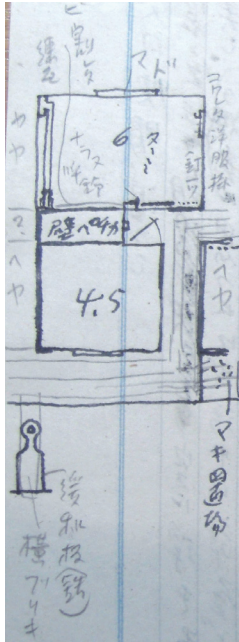
格扇未だ見らねど窓ガラスに防爆紙の模様あり。

(のき)

飾りに面白きものあり。ドロの並木美し(幹白し)。氷解でデイネイ。ブタ親子街にデヤボく遊ぶ。

(満人の家)

露路氷りてうづ高し。便所(二階は三間位の深さ)下一間位にピラミッド形に氷りてとがる。洗面の水にモヤシの尻尾あり。



間取り(4月18日)

部屋の説明「コフレタ洋服掛／釘一ツ／マド／ヒ割レタ練瓦／ナラス呼鈴(上)「壁ベチカ」(中央)「マギ置場」(右下)「緩和板(鉄)横ブリキ」(左下)

四月十九日(日)

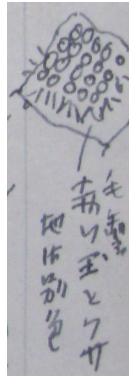
曇 寒冷。モ、引を重ね出る。風あり、街は黄塵にけぶる。

新納氏、武田氏を待ちて十時半出発、黒河神社に参拝、ジュンナンの碑参拝、碑背面に一九一六年ブラゴエの反革義勇軍に投じジュン死せし六柱なし。望遠鏡にて対岸をつぶさに視る。ドロ樹の上に看視小屋の如き鳥の巢あり。マツチを借るべく入りし満人の家が豆腐製造所にてロバが引ウスを引いてゐる。馬三匹仔馬一匹、井戸のある家畜小屋に入りて収録する。仔馬尻をよせてけりあげたりかみつく。十二人の寢室列車の如く中にテーブルあり。豆乳に茶糖を入れて大椀に飲む、勿体なけれど残す。ウーラーをはいたデヤングイ金をとらず「漫々の再来」。

江岸を下る。総てこれ木材の町輪船までテスリその他木材、壁、屋根、驚くことに木材の煙突あり。火事多き町なれば焼跡多し。焼跡の残骸に壁ベチカの残るみちる。一九二三年民国十二年八月黒河水量処の立札あり。英、支、露語で表はさる。よくぞ残れる。ハシゲタまで引つべがしてタキモノに持去る、満人にして、是非今のうち保護されたし。江岸路氷解け初めて道路飛びくゆく。

警察訓練所の中に丸太建三階のテンケイ的ロシア建築あり。望樓に登りて対岸をみる。兵舎たち並び下に至り歐風建物民家に至るらし。無人の風景さみしと懸命に探視す。あるく哨兵の柵によるあり、もつれ離れ対話するらし兵、三々伍々行きするあり。隊列を組み、て兵舎の間を消ゆるあり。バスあり、馬車あり、江岸を二人将校と兵卒巡視するあり。公園らしき処に子供ら混りて戯るあり。海水浴

場ダツ衣所建造中らしく働く人もみゆ。ザン壕掘り周らされ、トーチカらしきもあり。鉄条網江岸にはりめぐらさる、濃くうすくなる。奥に直線にのびてゐる大きな並木路を自働車、女もみゆとのことなれど遂に見出さず、赤、黄、グレの建物、白亜の上に赤き旗ひるがへる。重慶の旗もみゆとか。海蘭公園にゆく。材木廠から洲に渡りてブラゴエ愈々近し。下萌え、猫柳の林に入り枯草に寝そべる。音楽、唄声などきゝ温き陽の中にまどろむ。軒飾り紋様を集めしつゝ教会に至る。若き露人牧師、中の飾りも独特なり。近くの露人老医師の家に、ウキスキーの馳走になる。六十一オクリヤジフ氏二十一年間の生活をその上の船舶の多かりしことなど、軽きユーモアを交へ仲々社交家なり。各室を案内しくる。



毛製
赤い玉とクサ、地は別色

調度の家具類の配置など実にうまい、これはシシユウ(毛)の手芸品でも言へるが(各部屋部屋に妻君手製のもの充つ)、民族の教養であり民族的な臭ひの高いものだ。野菜の貯蔵庫が床下一間位、幅広の梯子あり。柔和な妻君と娘一人、(三人の子供、二番目の妻君はロシア領地で日本人でありし由)もつと沢山子供を造りたかつたが教育き関がないので制限せしよし。庭の一角に柿の木(ムシロで巻きつゝむ)シヤクヤクなど大切に育てゝある。

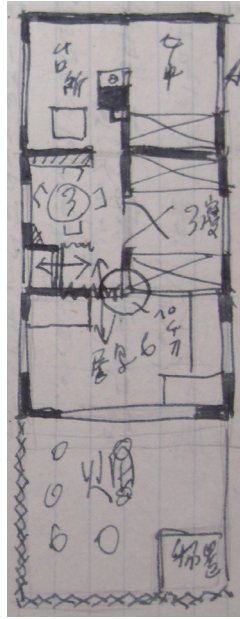
支那式ロシア料理店東洲飯店に馳走となる。パン(実に金満)スープ、(麵条湯)ウドンスープ、(牛肉餅)コロツケ、(煎鮮魚)サカナフライ、(俄斯克酒)ウオツカのメニユーも面白く、ウオツカ代り一本、コロツケ代り二枚(二人分)以上貰つて十円、メイテイ、マンブクす。外観、内部とも純支那風、看板に牛奶、雪糕、点心、啤酒などふり仮名のあるも面白し。十一時過ぎ帰館す。名残りにと暗の江岸にブラゴエをみてみる。兵舎その他六七箇所点灯する。その後方にボツト明るめる箇所三ヶ所あり。民家は後部に密集し点灯してゐるならん。後ろ山に三日の月赤し。夜氣至らず温暖、河は暗けれどおだやか、平和進チユウの日を国力と共に祈る。この日本土空襲のニユースをきく。

四月二十日 曇 うす陽さす。

七時過目醒めリユツクをまとめて外出、江岸に出てみる、河下ブラゴエの方雪模様のごと青くけぶる。朝の河面を渡り兵の歓声きこゆ宿にリユツクなく、ポーター持ゆきし由。壁、チカ収録、新納氏と馬車で駅に出る。半島人ポーターの醜怪二円すてやる。十時四十分発車、国境のドテをゆるやかに列車は下る。平坦なる野を進む丘坂をゆく。あと陵線丘の波を昨日に変わらず逆行す。〇〇多く駅々に下りたらまた入かはる、全で〇〇列車。南下するは速くうつらうつら寝ては醒む。孫呉を過ぎしも知らず、龍鎮に暮るゝ(八時過たれどスタンプの捺跡を確かむるほど明るし)。北安より細雨。合作社辺

り出張帰りの青年の武勇談隣席に賑か、寝台車に転ずる人々つぎて車中遂に閑散、横たはる。

猫一疋



葛屋旅館間取り（4月20日）

葛屋旅館

丘陵つづくに湿地帯なり、北辺に至るほど雪など残れど、山を下り、河岸に近き地帯は温暖らし

凍て返る黒河赤軍入れしめず⁽⁶⁾

春浅し国境越えて丘展ける

（6）四月二〇日、二二日に詠まれた俳句のなから数句が、『鶏頭』一九四二年七月号に掲載された。また、『句集 山の絵』が文化再出発の会出版部より約二円で出版される計画があったが（『近刊予告』『文化組織』一九四二年二月号）、頓挫した。日記に詠まれた句もいくつかここに収録されるはずであった（『山の絵——柳瀬蓼科句集』非売品、二〇〇七年、参照）。

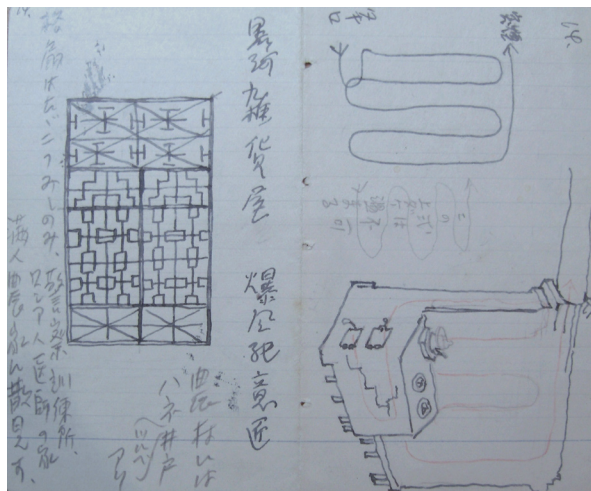
国境すアムール解氷^トけずつちふれる
つりふりて国境両都けぶりたり
下萌えのアムールの洲に寝返りぬ
江岸都ドロ楚々と立ち鳥巢あり
凍て返りアムールの底激流す
アムールの氷りてねむる春の闇
江岸の白亜の赤旗さへいて返る
赤兵の出つ入る江岸に春浅し
春未だ氷河横たはる赤き街
ブラゴエの声間近なる雪解けず
国境の中洲に柳猫光る

残雪の連峰国境越えて先
砲帯^{ポウタイ}鏡春の櫓に赤都に覗る
唄声のアムールを越え渡りくる
春の児らアムール越えて赤都なる
アムールの氷すれ／＼春のトビ
アムールの白くとざせるトビ低し

果てず野に野火は人家のごとく暮
国境に近き丘なり野火進む止まず
黒き野を山の端野火はもえ止まず
燃え燃えて北辺の旅野火つきず

猫柳つけて一隊兵ゆける
浅春の国際列車兵みたす
国境の鉄網に話す兵の春
残雪の上に哨兵をモデルとす
一線の兵涙垂る返る寒

馬車の春の国境シユバーなる



右頁：壁ペチカとペチカの構造

「タキロー煙突／この式は不可、上ダケ温まる」の説明。

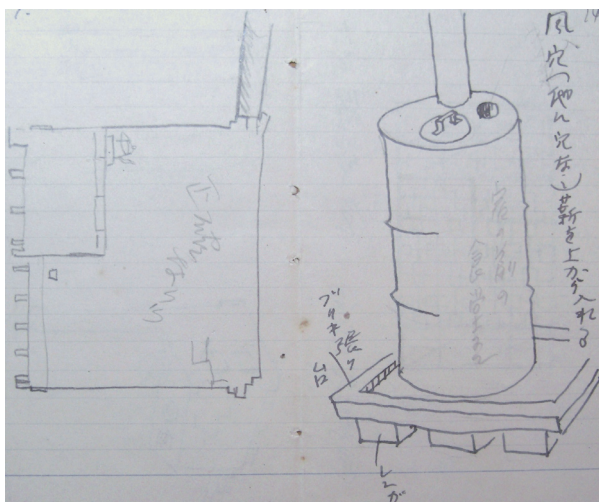
左頁：黒河雑貨屋の爆風紙意匠

「農村にはハネツルベアリ／格扇はたゞ二つみしのみ。警察訓練所、ロシア人医師の家、満人農家に散見す。」と記載。

なお、これ以降のスケッチと俳句は手帳サイズの紙片に記されたもの。

国境に向ひて劔す春夕陽
結氷すアムール砕き春の水くむ
水しろのアムール近し流れゆく
栈橋に解け解け残る春氷
結氷の岸をなぶりて春の水

隊長に兵舎次々余寒厳



ペチカと壁ペチカ正面図

ペチカには「風穴（他に穴なし）薪を上から入れる／宿の前の食堂にて／ブリキ張り・台／レンガ」の説明。

洋々と春野果てず北の旅

チエホフに遊ぶや春の露人宅
春の猫調度とゝのひ露人宅

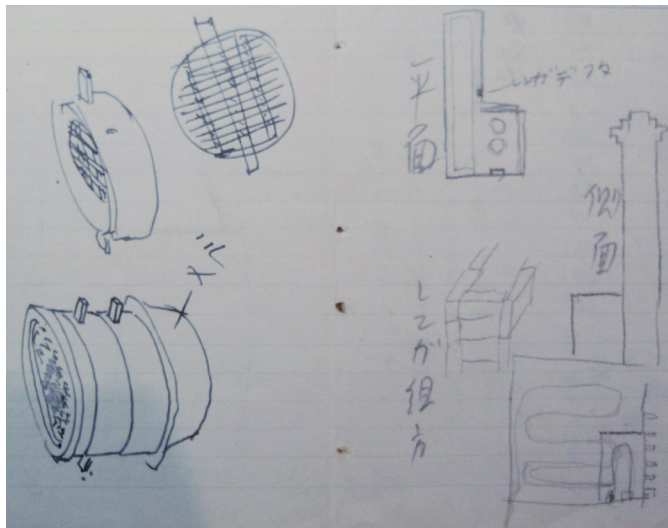
露人宅スラヴシウの色こゆし

つちふりき国境黒河ぬりつづせり
たち舞ひて黄塵国境ぬりつづせり



「満人生活必需品、ナベ、シヤクシ、刀、セイロ（ナベ付）、茶碗、皿、ハシ」の記載。

このほか、上部に「満拓公社黒河出張所、黒河北緯52度？カバフ人境以北、左頁に「水質悪く茶しほからし。風呂で石鹼が解けぬ。河水で茶をたてるとうまい。風呂水も河水でたてるとやはらかく石鹼がとける。／建築技師は露人。ビール会社四隅に防樓あり。」と記載。



右頁：壁ベチカの平面・側面・レンガ組方
壁ベチカの平面図には「レンガノフタ」の説明。

左頁：ナベ

四月二十一日

ボーイにゆり起されて四時二五分緩化下車、未だ暗し。氷雨、風出で後雪となる。二時間近くを如何にせんと思ひしも、待合室に過し、満人農夫たちをスケッチして過せば瞬時なりき。群り巻きて彼等も嬉々たり。自ら一尺の正面に近みてモデルを申出るあり。布団の中

味面白し（スケッチあり参照）、デツキに東拝す。停車時永く発車せしを知らずまどろむ。龍船に目醒む。地平雨に煙りて野の海をゆく。この地方殆ど耕地されざるなく、遠く切妻型の農家聚落を散見す。

朝食（ハムオムレツ）（メシ）（紅茶） 一円五錢、内地の倍値。

新京発車後同席せしかの満人、協和会服で食堂に入るをみる。満人助役の慶城を離るゝあり。日満飽和風景をみる。

水すれ／＼の湿地帯づく、平均8、6寸の地下に隠見する水、高さも二尺以下か。畑のウネの間にとろ／＼空光る。又内地風な不規自在なるウネ、この地方でこの旅に初めてみる。水田ならん、鮮農の部落らしきものを求めど雨に判明せず。

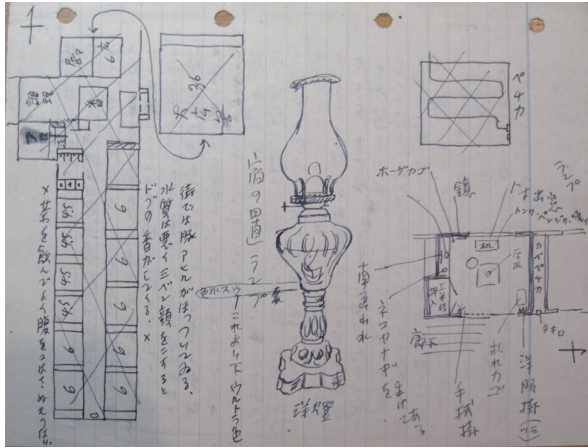
駅なきところに停車す、のぞけば車窓左手に間近く開拓部落をみる。円倉並びか細い見張りのヤグラ立てり。トラツクの尻の見える小屋もあり、ひ弱し。機械農場らし、壁の上塗落ちしドロの家（外形は満人風）建築のヒ弱き骨組をもみる。この湿地帯に保健を気つかひて見送る。開拓団青年二人ホウバの下騎をつつかけて雨の中に見送つてゐる、顔明るくほつとなる。

鉄山包十時七分着、雨激し。駅嚴重にして駅長室に入るを得ず。駅前に満拓事務所ありとき／＼しも見当らず馬車出払はんとするため青年（満州房産出張員と出迎への現場青年？）と同乗、街は一里、満拓事務所はその街中にありとき／＼驚かず。駅前とき／＼下車せし人の広バクたる平野にさへぎる物なく五里六里をゆきて事務所にたつし更にき／＼て目的の部落に入るとか。三間巾以上の道路なれどぬ

かるみてひどし氷雨のつぶてまつ向、南満の馬車と違ひ踏台なく四角の枠の中に腰掛あるのみ、輪をふみて飛込む、ジク心の外に一本足をのせるに足る金棒横たはる。踏み外さんか泥濘の中に引きつづされん。街の入口いかめしく下りて徒歩、湿地の中の街なり。満人家屋風にドロ造り草ぶきヤネ。とけて傾けるごとき家などあれど何々ホテル、何々料理店などの看板も見え賑か、黒カバン協和服の長靴のハゲの幹部らしきオヤチと連れだつ。ヂヤノ目をさし、意裳の包をか／＼し芸者連れだつ。黒塗のアシダをキョウウウに歩みゆく。商品の窓にのぞきて満人商店など交りぬかるみに浮ける町活気あり。ゴールドラツシユ——にはか街、開拓団によつて開かれし街の中心に歓迎塔たち「——などゝある。満拓出張所長松

宮氏気持よく迎へくる。手配などなく、この点お役所向の手配は既にあきらめおれば苦にならず、松宮氏の長講拝聴のうちにトラツクの用意なり。好意に乗りて松宮氏案内にて韓家開拓団本部にゆく。チエーンを巻ける車輪度々スリツプす。六キロの地点平地を昇るゆるき陵線の上に聚落あり、鉄レイ至るところ、道路の広さだけは堂々としてゐる。而し雨気河の氾濫で沈没し去るよし、道路の雨側に一間幅の灌水路整然と空をうつつ。途中落雷に屋根の抜けし家などあり。屋根草はげおり、この地方風強き由、学校帰りの開拓団児童にあふ。一人、三人凝りてカツパをかぶりゆくなど、先には橋下に雨宿りしトラツクを止めて便乗を求めしかみさんなど、まづ開拓民の明るい純朴な顔うれし。ドロを固めつみし土壁めぐらす本部に入る、団長留守。幹部の人達の案内で見学する。

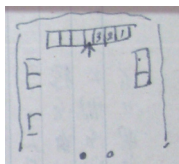
二家族家屋、診療室、学校、合宿所、共同炊事風呂場、家畜小屋、乳牛種馬小屋、鍛冶小屋、テイテツ小屋、事務所脇に消費ハン売所サケ・カニのカンヅメなどあり品豊富、井戸、便所（ベニヤ張りメツラシ）は外、冷下四十度を越へる、雨中に豚三々五々食ひあさる。こゝすらまるで湿地の部落、幹部室は四部屋 家屋、二部屋づゝ壁ペチカを中に分る。二部屋のシキリはキレイな建具の障子、畳敷、机あり書物類、調度品、然るべく、一間はペチカ、一間は燭^{サドル}、合宿



ペチカの構造（右上）、開拓団幹部室の間取り「ホーグカゴ／鏡／八寸出窓／インク、ペンジク、筆入／ランプ／南画山水／ネコヤナギを生けてある／上半段押入／手拭掛／灰皿／乱れカゴ／洋服掛（三ツ）／タキロ」（右下）、宿の置ランプ「洋燈／これより下ウルトラ色」（中央）。左には、「街では豚アヒルがほつついてある、水質は悪く三ペン顔をこするとドブの香がしてくる。茶を飲んでよく腹をこはさぬものなり。」と記載。

のユカの落ちた凸凹のアンペラ敷ドロ壁、ツリ棚の殺風景と想ひ合す。帰途トラツクを寄せて野菜貯蔵庫をみせて貰ふ。二間深さ一間盛土、中五坪位のよし、上部に入口あり。松宮氏斜面形、野菜のつめ込方など指導す。醸造庫をみせて貰ふ。戸をあけたため紙張りの窓がぱり／＼いつてゐる。天井高くだゝつひろし（高さ三間余坪50位か）。味噌の入る大きなオケ六つ。上に豆をふむための雪鞋おきあり。

近隣の満人農家をみせて貰ふ。豪農らしく家屋のたゞずまい典型的なり。①奥の佛間など古び大きくめづらし、②クツ底をぬへるカミさん女の子たち老婆うづくまる、③柳条を編める老僕、入口では馬具の木片に綱をつけてゐる。西側に三部屋あり、農具の加工するあり、六間房子ならん。



この家に格扇（別掲）あり。主人がインテリらしく洋服着で応対してゐる。松宮氏にきくに初期とり入れし満人風農法は最近揚棄せしよし。雨止まず北斗行を中止し出張所に帰る、五時。ヌカルミをウカイしてホテルに着く。新らしく入って内部のキレイなのに驚く。女中さん東京の空襲を伝へ、新聞紙を持ち来る。都会人なる哉、幾日みざる。空腹のごとくガツ／＼と字を拾ふ。風呂にてはからずも北斗の青年に会ふ。明日県聯大会？ある由にて泊りこみしならんも北斗は僅か三キロの地なり。一方の青年25は度々内地へ往復すらしく脱線気味、一方の青年32やゝ地味、宿泊書に職業開拓幹部と自署す。ランプなつか

し、疲れありしか早々に寝る。部屋／＼酒宴、人の出入に賑やか、目醒む。時に十二時、県聯の幹部連中ならん、サーベルの役人などあり。風評下馬評などさはがし、人手すくなの女中君に同情す。便所の方に嘔吐の喉なる、目醒めし俣日記を整理して二時。宿は壁ペチカ部屋にすべしよし、奉天の宿よりよからん、泥の街のめつけもの、街の印象を浄化す。

四月廿二日

曇、寒冷、ドロ水で調理せしような朝食、干鮎あり。早速に下痢、馬車を備つたが九十銭といふ。三十銭が規定なり。「多々的」を強調す。その意味後に至りて判明す。宿専属の馬車屋が側に居る。料金は「ニーデスイベン」「快走でナ」いつまでも御者ニーヤ馬について走る。食前か病馬か馬をいたはり泥街をのろのろと左に折れず真直ぐにゆく。リンリンと鈴をならして威勢よく追越してゆく馬車あり。明るい冬帽の少年御者、スキー帽に黒ガイトウのエリをたてし二十二、三の青年の客、同じく駅に急ぐらし、道を間道にとりて曲る。といつても枯草の曠野、行手に鉄路盛り上るのみ、やがて引返し追越す。

駅舎遠くあと十五分。行ずり便乗を乞ひて移る。泥濘の道は昨日の直線路とことなり鉄路をはさみ蛇行す。二度鉄路を越し車輪没し去るぬかるみに落つ。下車して馬を引く。少年の犬か馬にぢやれつき／＼添ふ。はては他犬と行手をはづみ咬み合ふなど、列車はホームに入る。又泥濘、少年のムチ遂に折れ飛ぶ。ヒモを拾ひて漸く

本道に出しが馬動かず自働車行づればなり、汽鑑車は白煙をあげ汽笛なる、万事休す、青年「後辺往」^{ヤシ}と命ぜしとたん、動きかけし車体休止、間に合ふやもしれずと横つ飛びに走る。開札をふつとばして飛込む間一髪発車、青年はとみれば前方三等車なり。彼は林業関係の出張にゆくらし、三等車は満員、苦力百姓の間に立ちおり、食堂車をすゝめしが肯んぜず、三等寝台車に席をみつめて案内す。彼の少年御者に礼を言ふを忘る。この青年と寒風の野を行きしリュウたる姿、若き日本の象徴のごと醜に焼きつけり。また金を与へメーフアツと棄て去りし彼の馬車は、振返れば引返しめせず、同じ枯野をはるかに歩むでもなく全じ歩調ののろき馳足でつけてくる。馬を愛する老ニーヤ幸なれ。

薄陽さしく、明けてみれば黒龍江の北辺と違ひ濃紫に山の遠景あり。陵線上には開拓団部落が散ばり、軍艦のごとき大訓練所など見ゆ。街は遙か土の中に消え込んである。小川を右につけ、やがて列車はゆるきこうばいを山間に入る。岩手、石長と駅と重ねることに薪タバの景観を増し、林業経営の規模を加へ山は深くなる。レンガ建の工場など見え駅舎など立派になるも面白し。停車の度ににぎやかにはき出る林業苦力、その中で、前方車から独りのろ／＼と出できし老人目だつ。フェルト帽のツバを思ひ切り度く折りあげ、スソの長い上衣にしめたオビ、広げつばなしのフトン^{フトン}を背に、工具ののこぎりを丸く二つに折ちもち引きづるような足どりで開札へ出てゆく。写真キをもつて追はんとしたが構内ゆえおしくも遠慮せり。

鉄山包よりの車内は何となくフン、臭く、食堂車のボーイからマネー

ヂヤーまで全部か満人仕立て、客も余の入ったときは満人ばかりで、十二三才の弟と差向つてゐる二十一二の工人らしき満人が豪奢を極めてゐる。彼等の前にはランチが二皿、オムレツ二皿、カツ一皿、更に親子丼二つを注文し自分の分をハシで分け与へてゐる。他の二人客は日本酒二合ビン二本立てランチを食べてゐる。満人が昼間飲酒してゐるのは始めてゐる。この二人は夕食時までこゝでねはつてゐた。これも日本化の面か。一人だけ日本人ありと彼の物スゴイ視線で知つた。彼は仲々その視線をほどかず、車外の風景をかへりみなかった。風景に興味なき人は不孝である。かゝる学者を知つてゐる。

聖浪から南叉までは内地の早春の高原風景で、一寸小諸から小淵沢へ八ヶ岳をぬける、小海線のようなところもある。遠き山容はやはらかな線で肌は浅い雪をかぶつてゐる。全じきよ離をおいて山を下るソリン、密林、が両側にあり、河がついたり離れたり、たまつて沼となつたり流れたりしてゐる。伐、サイの古りしもの新らしきもの、横たはる朽木など、根を天に裏返せるあり。この中に、ドロ、樺、ヤナギ、エゾ松などの幼樹がはや密生してゐる、万目涸れつくした中に柳がぼつと赤く芽をふいてゐる、河は流れるかとみれば氷り、又流れる。

達里から二キロの奥に五〇コのエゾ松の開拓団がある由。

雪チラリ

南叉の停車時間に助役へ佳木斯の宿の手配をたのむ。この手配は成功。

南叉から山容あらたまりがたり、山地も河幅と共にひらける。耕地がみえはじめ、涼台過ぎるところから暮れきつた中に、開拓団部落が近く遠くみえる。トウバツヒ、ゾクの古戦場らしきものなどサントリ。香蘭からシエード下り（外望断たれ）単調、隣席に、席替の途中らしき二人づれ、オヤヂをお父さんと呼び、ラツコ皮エリの外トウ女二十四五、

「うちどこへゆくのか判らんにどこへゆくか問はれて困る。警察に行つたら長女かほんとにかきかれる——」

お互にあけつ放しに現金主義を露出してゐるのでいらぬ感傷を擧げる。背合せの男女の身の上対話も悪周セン屋で流れてきたうき話。解け渡る、松花江の上に半月あり。十時四七分着、駅前は、夜の干潟に出たよう。ガラ、くづを敷いたようなり。漁火のように灯の明滅するところが駅前ならん。かなり離れた闇に洋車がうごめいてゐる。湿地に夜の灯は近くみえるとか、洋車に乗る、駅前の宿は速ぐだつた。車中も十二時間余を費した訳だから、時間では東京から大阪までも乗つた訳だらう。が実際の感じは静岡位にししか考へられない。もと／＼だめなところへ数理的観念は更にこはれてランチパゾウとなる。

中間仮駅停車中飛下りて道側の水溜りの水を具（水くむ具）に入れて持戻る百姓あり。

北辺の冬つらなるトラックの列中に婦人
結氷期から解氷期まで閉ちて覚悟の婦人たち

傾きて解氷の層青磁たり
ゆたゆたと濁れる江に流水す
流水の岸に傾げる濁流す
解氷の江濁々と渦巻ける
流水は岸に動かず濁流す
興安の分水嶺の木の芽時
興安の褥^{すゐ}をたゆたひ広ぐ野火
解氷の浮沈みゆく渦巻けり
解氷の江に切りたち興安嶺
春浅く興安嶺の肌さめず
春浅き興安の山肌下る
流水の連れだちてゆく江に添ふ
興安の褥^{すゐ}焼野して江を引く
流れの間々^{うち}春の月江渡る（松花江を渡る）
春月し浮氷片々江うごく
江上に春月黒く橋ひけり

四月廿三日

快晴オーバーを棄て、午過ぎて外出。そば、うどんとある店に入れば和服のカミさん出できた。たくさん日本語だが鮮人家庭、いんちきな丼を食ふ。S氏を洋車で訪ねあぐむ。Yなる青年多忙の中に実に漫々^{まんな}のぢようぎをひきて地図を書く。道路に遊ぶ日本の幼少年

達の何と神経のにぶき、このことS氏も認める。支那人はぶつかるまで真すぐに歩つてくる。ゴウマンにあらず、日本人なら両方でさくるべき神経なし。運転手にしてしかり、行人の直前に至りあはて、警笛をならす、支那の犬しかりし日本婦人達のネンネコ姿、肌の荒れ、神経の荒れ目立つ。松花江をつきとめぬと安心ならず洋車を直行さす。江岸に人群る、日、満、鮮の中にロシア人五六人混る、日本の国民学校男女生たち多し。流水河江に充ち流る、一寸のスキもなきほど相まし江岸にせり上られし氷片は動かず、青い層（一尺四五寸？）の空に向けるあり。流れと岸との氷面はざり／＼きしみて砂氷に泡立つ、陽に照りて目がいたいよう、白いスクーリン^{てい}の流るゝよう、よくみると、ぐる／＼舞ふあり。八畳敷位のが立つあり、底を返して泥面を向けるあり、壮観極まりなし。S氏が朝見たときは動かざりしとか、二三日の雨で動き初めしとか。岸辺に満人子供達小さい氷片をとりてかじりおり、ゆはへて持帰るあり。満人船頭だち船を押して力めど動かず。豚の遊ぶ泥道を満人街をうろつく、ところ／＼旅棧に淫売婦みつ。この理由後にS氏の説明にて判明す。工人街らしく面白く、鍛冶屋、馬蹄^{アイ}屋など、うすぐらき万才風の茶館もあり。S氏宿に來りて初対面、三江会館にゆきて話し込む。国通のS氏、日本人の在り方、満州国官吏の錯覚、漢人のあてにならざること。百姓達は言はれた通り大豆を作る、○票を払

（7）柳瀬は、この他の原稿執筆時にも、スクリーンをスクーリンと表記している。

ふ、それで主食のパーミー、綿布、鞋のゴム底それが欲しい、それ
が得られなければ次から言ふことをきかない。「日本人は嘘を言ふ」
といふことになる。厳肅な日本帝国の在り方、思ひよつた満洲國、
軍はもつと中心に厳存されたし。「太平洋」にて植民政策の中で性
慾の最重要たるを知る。土着の鮮人たちのあり方、協和会の提案に
「日本人と満人との結婚の項」あり、もつての外なり。S氏を女の
元に置いて銀座通りの夜更を歩き帰る。春の月照りてダ、ツ広い消
費（開拓民のための）都市温かし、したゝか酔ふ。

四月廿四日 快晴風強し

佳木斯発十時四十分軍人と同席す。満州認識について、満州はアメ
リカとインド同じなればアメリカへゆくと思ひて同胞に來れと、兵士
の性慾シヨ理及びそのセツビについても話す。弥栄十二時廿六分着、
駅頭にバタ、豆乳、玉子など開拓民農婦出て飛ぶ如く売る。満日
の開拓地視察のO氏と一処に案内所の男に連れられ、团长山崎氏宅
にてゆく。村の人達二、三同席し第三者に聞かすべきような話題展
開。質問の目的その間につきて、その要なく雄弁のO氏もしづかに
訓練所生徒作の手芸品など拝見、貨車便乗で千振へ廻る時間迫りて
O氏ゆく。一人醸造所、組合、学校、病院をみせて貰ひ「遠いから
乳牛はいゝだらう」とて別る。この説明者、道草を食ひ、後の客が
来るからとて行きぬ。村を見たいといひしに「こゝらの満人住居と
全じです」間取はこうだと地面へ略解せり、たつて道をとひしに向
ふの山を越えれば向ふにみえる四軒それが一番近いといふ。強風の

中を独り東に向ひて泥土の道を福島屯に至る。

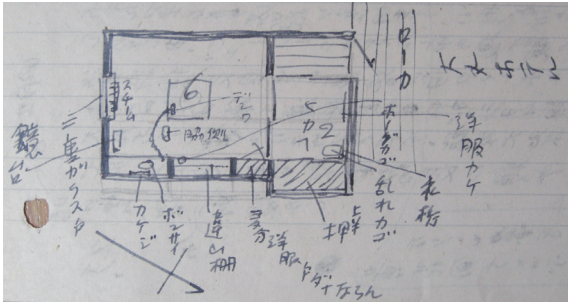
こゝらも湿地なり、スケッチをとりて暮る。満人小作たち帰れど遂
に畑より主人帰らず。すゝめらるゝ俵夕食の馳走となる。カユに玉
子を落しあり。ミソ汁、コウコ皆うまし。隣家よりボタモチ持來り
頂く。既に八時漸く昏るゝ俵別る。風強し、半月かゝる。山崎さん
宅に寄りて十時近し。駅に急ぐ。泥土にすべりつゝ大におそはる。
灯なく荒りヨウたる満州の野の実感あり。真暗な案内所にリュック
をとる。列車來るに待合室にたつた一つのランプふき消さる。黒い
駅を残して十時十二分発車、開拓民のあれこれ去らず、一時近く寝
台に横たはる。

四月廿五日 晴、曇、後、小雨、温かし。

七時三十五分着、駅事務長に頼み駅前大丸ホテルにリュックを下す。
臨時大祭にて鉄道局休日、漸く資料係長自宅に連絡、宿ヤマトホテ
ルに予約しありし由、ビュローにゆきて市の概観をきく。ホテル
屋上塔上より展望す。小形新京といったたゞずまい、消費都市なれ
どさすがは軍都、都市設計地理等、佳木斯よりは腰のすはりが違ふ
やうみえる。黄花園子といふ一部落なりしときく。南面はるか、は
づれに旧街域満人街みゆ。西に連つて鮮人街、この直線に見えかく
れして光りつゝ街クの切るゝ辺りから東へウカイしてゐるのが牡丹
江。塔を下り、南へ直線に足を延してみたが江は先へ先へと遠のく。
西方に江面あるごとくゆきて錯覚と知る。西端の鮮人街の汚れた裏
街をほつつきつゝ大路に添ひつゝ、東へ満人街をゆく。東端に近く市

場あり。人々立つくすによくみれば一品つづたとえは衣類をもつもの鉛筆をもつものなど、それを中心に購買者が値をつけてゐる。露路に飲食店並び小便小路は平康里なり。寄席なども立混る。小雨落ち来る。

新都市々域に立戻り太平路、銀座通りを見物す。兵士たちの多きこと入交ふ敬礼の波、酒気に赤らむ、芸者の高島田、五六年前追はゴムの長靴で箱下げ、泥の街を歩きしよし。当時の転勤者には会社員



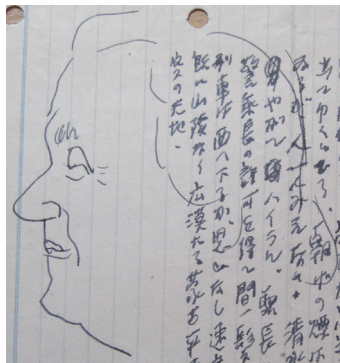
大丸ホテル間取り (4月25日)

部屋の説明「ヒカへ／洋服カケ／衣桁／ホーグカゴ／乱れカゴ／上半押」(右)、「多分洋服戸ダナならん／違ひ棚／ボンサイ／カケジ／二重ガラス戸／鏡台／デンワ／脇側／スチーム」(左)

たちも長靴の贈りものをせしよし。雨足やしげく舗装路の他は道悪し、宿に帰って旅中のウキスキーに手をつけて遂にあける。早々に寝て熟睡してゐるところへ資料係長の野坂氏来る。大阪展のとき会ひし熱の低い人。連絡の粗ゴの弁明あり。明日のロマノフカ行の手配を頼む。眼醒めて整理ものその他に四時半となる。

五日 快晴

東天拝、赤陽、朝のやはらかい光。列車の煙、電柱の影が長くのびて影の光はやはらかく緑をふくんでゐる。枯野草原は伸びてやはらかく、朝の日にフェルトの感触を与へる。興安の嶺を越えて列車は真西へ向つてゐる。放牧の群が朝モヤの陵線に黒く塊まり包がみえる。初めて間近にみる村落は広く抜いた本線の路の両側にあり。放馬が足並かるく野に出てゆくとこころ。朝げの煙は低く上りてゐる



が、人一人みえない。清水の増浸やがてハイラル、駅長との打合せなく固る、警乗長の許可を得て間一髪発車、列車は西へ下るか、思ひなし速度が軽く早まる。既に山陵なり広漠たる蒙古平原、四周たゞ野と空の天地。

* 四月二十六日～二十七日

(8) 日記中の「4.27」というスタンプの一部や「4月27日」のメモ書き、当時の旅行日程表(柳267、東京都現代美術館所蔵)により、推定。



「с ч ё т ы ショーテ
イ」のスケッチ
「ボヂヤースト どうぞ」
のメモ書きあり。

旧沿海州ペテロパウロフカ、アルヒボフカ、カノミンカ等よりロシア正教の非改革派・スタラヴェール、

密林の言葉（木の枝を折つたり、曲げたり、）

横道河子陸軍特務機関提出部落建設許可請願者

戸数 26 人口 139 牛 35 馬 34 鶏 350 蜜蜂 函 86

南向の隅の下方にキリスト像

復活祭前？ 後一週間？ 飲酒牧師

ヒュツテ気分、ホツポ温泉を想はす裏山

カードチエコフ

白系事ム局代表

一冬 30000 円

ノロは玉（銃丸）を食ふからとらぬ

モヤこめてせゝらぎ高し春の闇

猫柳ロマノフの児ら陽に噛める

猫柳芽は流れつゝたまる岸

現ロマノフ村の持つてゐる銃はヒゾクトウバツから取つた銃第一

年目三

ヒゾクの居ル所でなければ猛ジウは居らぬとてドン／＼入つてゆく虎に狙うつ

最小限度で最大歓喜——耐爆死について——

ロマノフ

1937—5月 沿海州から逃げてきた、8家族。1ヶ月後、全満

からいろいろ7家族

→二道河岸

メルゲン

三河

1921—2 一般民衆逃亡

ロマノフ——山へ逃亡

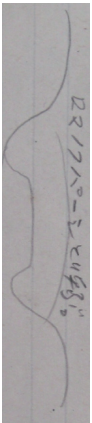
1931—2——山から出て満州へ出る。

1年後調ム客その他となり（大家族は第1回と去年、他はほう／＼）

初め無一物（猟で立てる）

名称 谷（両方山でボン地）の名とロマノフ王朝の名。

ロマノフパーシと呼ぶ。



ハンダーカシ 横道カシ（女の名ハナー）（クラーヘーン）

冷山

馬57頭、仔馬24、牛29、仔牛10
頭高嶺子——分水嶺 ザット一両

4月27日

ロマノフカ

去年 虎——17匹（5匹イケドリ）

一匹20000円

ツガイ50000円

死10000円

等分に分ける

柳樹から3軒、柳樹河岸西方砲台跡

満鉄の土地でなし

昭和6年移住、24家族

（昨年24、5家族）現在40コ、326名、（1コ辺り5、6名）

カラフトから3家族移住

結婚目的一人辺り30000円

密珂（ロマノフカから山を越して15）、昨年

◎嫩江——メルゲンから6家族49名 墨爾根

博克図——綽児チヨール（40—50キロ入ったところ）7家族41名

三河4家族17名

計19家族107名

去12月—年年3—9頭（4生捕）

野地坊主（湿地草の塊根）

亜布洛尼 青雲 ↓草葉をふき平地開ける

メルゲンヨリ来ル旧教徒略歴

1932 ソ聯スバスク区ワルバホフカ村

ボートにのりイマン經由虎林に逃亡（7家族12名）

1934 シリンへ村に移住

当時は匪賊多きためチヨールに移住

1935 綽児（ツアイ）村に居住 家族10家族

1938 メルゲンに移住

10家族内1家族はシリンへに移住（マカロフ）

1家族は41年1月オーストリヤ弟のクライノフの許へ

移住ス

1941年5月 ロマノフカに移住